



感染症とたたかう

第12号

2016年
11月発行

発行：国立大学法人 長崎大学 監修：長崎大学病院 感染制御教育センター長・教授 泉川 公一
お問い合わせ：長崎大学熱帯医学研究所 〒852-8523 長崎市坂本1丁目12-4 TEL：095-819-7800（代表） FAX：095-819-7805

● 私たちの暮らしと感染症 ●

のどが痛くなる溶連菌感染症 薬は最後まできちんと飲む



発熱、のどの痛み、“イチゴ舌”が特徴 体や手足に赤い発疹が出ることも

子どもが38～39℃の熱を出し、のどが痛いと言えりなど風邪に似た症状になったとき、咳や鼻水がほとんど出なければ溶連菌感染症の可能性が有ります。溶連菌とは「溶血性連鎖球菌」のことで、いくつかの種類が有ります。最も多いのはA群β溶血性連鎖球菌で、主にのどに感染して、咽頭炎や扁桃炎などを引き起こします。2015年は1年間の溶連菌感染症が過去最多となりました。

流行のピークは冬場と、春から夏にかけての年2回です。子どもがかかることが多いのですが、最近では大人が感染、発症することも少なくありません。

溶連菌に感染してから症状が出るまでの潜伏

期間は2～5日間です。溶連菌が侵入した場所によって、症状はいろいろと異なります。代表的な症状は、のどに感染したことによる発熱（38～39℃）と、のどの痛みで、しばしば嘔吐することがあります。その後、体や手足に小さな赤い発疹が出たり、舌にイチゴのようなブツブツができたりします（イチゴ舌）。そのほか、頭痛や腹痛、首すじのリンパ節の腫れもみられます。熱が下がると、発疹になった皮膚がむけるようになります。

のど以外の粘膜に感染すると、中耳炎や副鼻腔炎などの病気が引き起こされます。皮膚に感染すると、伝染性膿痂疹（でんせんせいのうかしん、「とびひ」のこと）や蜂窩織炎（ほうかしきえん）になることがあります。蜂窩織炎とは、皮膚の深いところから皮下脂肪組織にかけて起こる炎症で、広い範囲が赤く腫れ、痛みます。いずれも、治療するには抗菌薬を飲む必要があります。

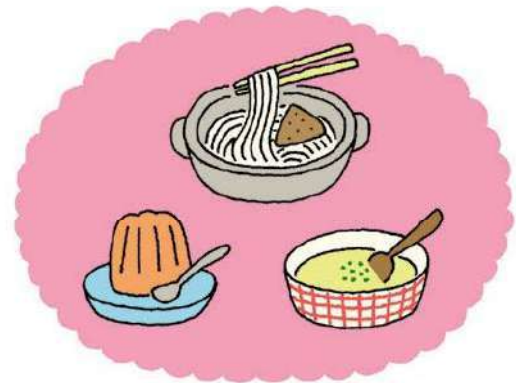
そのほか、溶連菌の直接の作用ではありませんが、感染後にリウマチ熱や急性糸球体腎炎（きゅうせいしきゅうたいじんえん）など重篤な病気を起こすこともあります。抗菌薬による治療が普及する前は、猩紅熱（しょうこうねつ）のように隔離が必要な重い病気を引き起こすこともありました。

なお、敗血症性ショックを来す「劇症型溶連菌感染症」がしばしば問題となっています。新聞やテレビで「人食いバクテリア」と呼ばれるもので、わが国で最初の患者は1992年に報告されました。現在も毎年100～200人の患者が発生し、このうち約30%が死亡しています。劇症型溶連菌感染症の原因となるのは、子どもがかかる溶連菌感染症と同じくA群溶連菌ですが、劇症型の場合は、通常は細菌が存在しない血液や筋肉、肺などに菌が侵入し、急激に症状が進行します。従って、子どもの溶連菌感染症とは区別されています。

抗菌薬は症状が消えても飲む 食事は口当たりの良いものを

高熱とどのの痛みが2日以上続けば、かかりつけ医を受診してください。最近、のどに付いた細菌が溶連菌かどうかの判定が5～10分でできるようになりました。溶連菌が原因とわかれば、熱やどのの痛みなど症状をやわらげる薬のほかに、溶連菌に効果のある抗菌薬を服用します。

薬を飲み始めると2～3日で熱が下がり、のどの痛みも軽くなってきます。しかし、症状が消えても抗菌薬はしばらく飲み続ける必要があります。医師から10日分ほどが処方されるので、最後まで飲みきるようにしてください。これは、溶連菌を確実に“退治”するためです。完全に退治することによって、リウマチ熱や急性糸球体腎炎などの



重い病気を防ぐことができます。

溶連菌感染症でのどが痛い、食欲がなくなる場合もあるので、そのような場合は、子どもが好きなものを食べさせましょう。ゼリーやヨーグルト、プリン、ババロア、スープなど、のどごしや消化がよいものの方がいいでしょう。少し食べられる場合は、おかゆやパン粥、煮込みうどん、豆腐、麩、茶碗蒸しなどもお勧めです。ただし、熱い、辛い、すっぱいといった刺激の強いものは避けます。食べるのがつらそうな場合でも、水分だけはしっかり摂るようにしましょう。

溶連菌感染症は患者との接触を介して拡がるため、家庭では子どもの兄弟や親に感染しやすく、学校では集団感染も多くなります。また、日常生活の中で、患者から出る咳やくしゃみなどに伴う飛沫による感染もあります。一人がかかったら、一緒に遊んでいる兄弟への感染に注意し、できれば一緒に検査を受けるとよいでしょう。

なお、溶連菌感染症は、学校保健安全法では第三種の感染症に分類されていますが、出席停止期間などは定められていません。熱が下がり、のどの痛みが引いて本人が元気であれば、登校してよいでしょう。その場合でも、薬はきちんと最後まで飲み続けてください。

次号（2016年12月号）では「おたふく風邪」を取り上げます。